

日本古典全書 井原西鶴集 二

監修

佐佐木信綱
柳田國男
新村出
山田孝雄
津田左右吉
和辻哲郎

井原西鶴集 二

藤村作校註

朝日新聞社刊
日本古典全書

日本古典全書

「井原西鶴集」二 藤村作校註

昭和二十五年十二月二十五日初版發行

昭和三十一年三月三十日第四版發行

印刷所 圖書印刷株式會社

發行所 朝日新聞社（東京都千代田

區有樂町・大阪市北區中之島・

小倉市砂津・名古屋市廣小路）

定價 二四〇圓

目次

解説

一、好色一代女……………三

二、文體……………五

三、好色盛衰記……………六

好色一代女

卷 一……………一五

目 録……………二七 國主の艶妾……………二六

老女のかくれ家……………一九 淫婦の美形……………三一

舞ぎよくの遊興……………三三

卷 二……………三九

目 録……………四一 淫婦中位……………四三

目 次……………一

目次

二

分里數女……………四

諸礼女祐筆……………六

世間寺大黒……………五

卷三

三

目録……………五

調譚哥船……………七

町人腰元……………七

金紙七髻結……………八〇

妖孽寛濶女……………七

卷四

八五

目録……………八七

屋敷琢渋皮……………八六

身替長枕……………八九

栄耀願男……………一〇〇

墨絵浮氣袖……………九二

卷五

一〇五

目録……………一〇七

美扇戀風……………一二六

石垣の戀くづれ……………一〇九

濡間屋硯……………一二〇

小哥の傳受女……………一二三

卷六

一三五

目録……………一二七

暗女は昼の化物……………一二九

旅泊の人許……………一三

皆思謂の五百羅漢……………一四三

夜發の附声……………一五

好色盛衰記

卷 一……………一四九

目 録……………一四九

松にかゝるは二葉大臣……………一五七

夢にも始末かたん大臣……………一六一

是は新房崎の大臣……………一六五

夜の間の賣家化物大臣……………一六五

目 録……………一六九

見ぬ面影に入簀大臣……………一七一

難波の冬は火桶大臣……………一八三

惡所金預ケ大臣……………一七四

仕合よし六藏大臣……………一八五

目 録……………一八九

難波の梅や澁大臣……………一九二

無分別の三大臣……………一九五

戀風しのぐ紙子大臣……………二〇七

目 次……………三

反古と成文宿大臣……………一九六

腹からの師大臣……………二〇三

卷 四

三二

目 録

情に國を忘れ大臣……………三二

一生榮花大臣……………三三

目前に裸大臣……………三四

煙に替る姿大臣……………三六

菊紅葉鉢の木大臣……………三七

卷 五

三三

目 録

皆吹あぐる風呂屋大臣……………三四

後家にかゝつて仕合大臣……………三三

形はかまはぬ欲大臣……………三四

當流師仕立の大臣……………三七

色に焼れて煙大臣……………三七

井
原
西
鶴
集
二

藤
村
作

解 說

一、好色一代女

無署名。美濃紙型。奥附けには大坂眞齋橋筋吳服町角 岡田三郎右衛門版とあるものの外はない。表紙題簽の外に色紙型の貼紙があつて、これに各卷四章説話の要またはその一部を示した詞が記してある。この書の各卷首に掲げて置いたものがそれである。

一代女は一代男と對をなす意で作られたものであらう。すなはち一代男が男性の性慾好色の一代記風の形式を有してゐるのに對して、一代女は女性の同一代記の形をもつてゐる。すなはち各部を通じた一女性の人物を有して、それが門地高い家に生まれ、天資の美貌を恵まれながら、たまたま宮仕へ中門地低き青年と戀に落ちて邸を追はれ、家の没落のために、女藝人に身を落し、某富家の老夫婦に見出されて養女のやうになる。しかし、意外な早熟のためにこゝも追ひ出され、やがて國守の妾となつたが、こゝも國守の病衰のために暇を出された。かくて十六歳の年家の犠牲となつて、京の島原に身を沈めて遊女の生活に入

つた。美貌たぐひなく全盛したのも時の間で、その驕慢から人の愛と人氣を失つて、天神、圍などその地位を下されてゐる中に、惡疾に美貌を損じ、年季を終へて遊女の境遇を脱したが、生來の多淫と、生活のために、やはり賣色の群に入り、その上に欺偽的手段を弄することまで知つて、轉轉としてかういふ境界を巡つて行き、つひに老境とともに夜發の悲惨な身の上にまで落ちてしまつた。しかし老衰の身何の色香もなくて、人の顧みることがなくなつたので、生まれ故郷の京都に歸り、一日大雲寺に詣でて五百羅漢像を見ると、その中にこれまで逢つた多數の男に似たところがあるので、翻然として人生の無常を觀じて、ただ菩提を願ふ殊勝な心になつた。この時六十五歳であつたといふ。以上を一代女が老後尼となつて住んでゐた嵯峨の草庵を、當世風の二人の若者が訪ねて、來歴を聞くので語つた懺悔物語の形で綴つてある。

一代男と同じく好色生活の一代を綴つたものではあるが、一代男は男性の好色一代記で、これは女性のそれであるところに、自然に主人公の生活に對する態度の異同がある。好色生活の存在を肯定すれば、男性と女性とはその立場を異にする。男性は能動的で、積極的であり、女性は受動的で、消極的である。それで一代男世之介は徹頭徹尾、好色生活の種種相を漁つて、全國を巡り、各種の色の女を轉轉して居り、最後もこの世以外の色の歡樂境を探つて、女護の島を志して出帆してゐるが、一代女はその環境に誘はれて、さまざまな色で衣食する職業へと墮落して行つてゐる。八人藝の少女藝人を振り出しに、國守の

寵妾、太夫、天神、圍、寺小姓、梵妻、町人の腰元、諸侯の表使、歌比丘尼、婚禮の介添女、裁縫師、茶の間女、仲居、茶屋者、通女、扇屋の女房、問屋の蓮葉女、居者、暗者、旅籠屋女、遣手、夜發その他の境を彷徨してゐるが、その方向は上から下へ、高きより低きへと、次第に淪落の方向を辿つて、どん底まで落ちてゐるのである。この淪落の一つには外部からの生活の壓迫の力に押され、内部からは性慾に誘惑されてゐる。これはかかる封建的舊式社會における弱者としての女性の、往往辿ることを餘儀なくされたもので、西鶴はそこをよく掴んだものである。

作者の意圖は右のやうに、女性の淪落の真相を掴んで、これを一代女の上に描くとともに、一代男のやうに女性の側に立つてその時代の好色生活の種種相を、その職業的の面について描かうとする意圖をも持つてゐたのである。それで一代女は方便になつてゐて、特殊職業的賣色女群の描寫に専心してゐるやうな章も一二に止まらないのである。以上の二つの意圖を、主人公たる一女性の上に纏めて、その環境の變易の自然の經路を描き、二つの意圖の均衡を保たしめることが出来たら、恐らくこの好色一代女は一作品として、一層の高い價值を有し得たであらう。

二、文體

西鶴は大體から見て、俳諧から浮世草子に筆を轉じた人である。俳人から小説家へ轉じて行つた人であ

る。随つて、浮世草子に表れたその物の見かた、捉へかた、表はしかた、構成の上に、文體の上に、著しく俳人的、俳諧的などがある。そこに西鶴の浮世草子の特徴があり、この特徴を周圍の作家、後世の作家の上に殘し傳へてゐる。今はここに彼の文體の上のその特徴を一言して置かう。

彼の文體は、その用語、語法、修辭などの上に、古今雅俗を混淆したものである。それとともに、散文の中に韻文的、詩歌的なものを取り入れたものである。論理的、文法的なるべき一般地の文に、省略が多く、轉倒もあつて、文に引締りを與へるとともに文を難解にしてゐるのも、ここに一因がある。そのほかに文法的破格、修辭的破格なども存することは已に普く世に知られてゐるところである。余は大正十一年の早稻田文學誌上に「西鶴雜感」を述べた中に、これらのことをいつて、彼の文は一種特異な文體である。さうしてこれを解し易からしめるには、適當な補足と改作を試みるの要があるとして、その二例を試みた。

三、好 色 盛 衰 記

本書五卷五冊は、傳本極めて稀なものである。西鶴の署名はないが、他の好色本と同じく、彼の著作の一と認定すべきかどうかについては、多少異説も存し得るが、余は彼此の點を併せ考へて彼の全集中に收めて置くべきものと認めてゐる。

今から四十餘年前私は大阪圖書館の藏書中にこの書を發見したが、旅を急いだのでその二三章を拾ひ讀みして、西鶴文の俳を存することだけを認め、今井館長に稀觀の書と思ふから、注意されたい旨を述べて置いた。その後一夏大阪に滞在して、藏書家の藏書を漁つた時、再び本書を通讀して大體西鶴作中に列して見るべきものとするに至り、このことを故石川巖君に語つたところ、同君は新選西鶴全集を編集するに當つて、第一篇第一卷に本書を收めて出版した。これが本書の活版になつたはじめである。大正十一年のことである。近年吉田幸一君の手に依つて、本書の複製本が寫眞版になつて古典文庫第十九冊として出版されたので、傳本稀な本書もその俳を多くの人人に示すこととなつた。

本書には元祿十四年版の改題本西鶴榮花咄といふがある。但しこの書すら、今は全く稀觀の書になつてゐる。

本書は元祿頃の現實享樂時代の一面を代表する、所謂大盡を列傳風に綴つた斷章二十五章を集めたものである。これと著想の似たものには西鶴置土産がある。抑抑大盡といふのは、遊里の豪奢な遊樂生活に耽つた人人を指した語である。遊里の享樂生活は金銀に依つて購はれるものであるから、富豪をも大盡と稱するに至つたものか、或は逆に富豪を表した大盡の語が先きに成立したものか、余は未だそれに就いて考へたことはないが、本書に於ける盛衰の意義は、大富の有無、遊樂耽溺生活の可能、不可能の境遇を意味してゐる。

本書の所謂大盡は、元祿時代の粹人とも見難く、又江戸の通人では勿論ない。富家に生まれて富家に育ち、富者享樂の生活を身に著けた生粹な富豪で、遊里の享樂に耽つたもののみでなく、今の成金、新興ブルの如き一時の榮花に狂つた人もある。又下賤の生れ育ちでありながら、ふとしたことで大金を得て遊樂に耽り、その粗野な生活風を脱し得ない野夫の輩もある。これらも本書中に在つては皆大盡である。遊里は人情の最も輕薄なところといはれた。この世界は金銀の放れ目が縁の切れ目といはれた。それでいかにこの世界に持て囃された富者でも、一旦貧乏に顛落すれば、忽ち路傍の人と見捨てられるのが、此の里の習ひである。人生の榮枯盛衰の轉變はこの里ほど速く且つ著しいところはない。昨日の大盡、今日の乞食は屢屢この境に見られる現象である。

享樂生活の限りなき追求の相を一代男を描いた西鶴は、老と共に來る享樂生活の終焉の淋しさを一代女に描いた西鶴である。享樂的人生の盛衰の相を共に眺めて、別に一書を作るの興を起したことも、自然のことのやうである。

大盡の一生をその最も華やかな時に就いて見れば、洵に世人の羨望するところであつたが、富はその蓄積よりはこの種の消耗の方が速度の疾いものであるから、大盡ほど悲慘の末路を疾く世人の眼前に曝すものはない。それでその末路の時代に就いて見ると、その全盛の記憶の鮮かであるだけ、その痛ましい感じも深いものであつた。對照の近く著しいだけに人人の心を刺激する力も強いものがあつた。それで人生を

悲哀寂寥の方から見る傾向の作家に取つても、本書中の諸説話は好題材たり得るのであるが、本書の作者はそれと反對に、かかる人生の暗面を好まない傾向を持つ人で、本書は盛衰記と題しながら、衰の悲哀の面に對する悲痛の感じは洵に少くて、盛の一面が寧ろ著しく出てゐる。例へば卷四の第二「煙に替る姿大」の一話を見ると、一方には江戸から學問修行に京に上つた若者が、先づ京見物から島原に遊んで、次第に遊蕩にはまつた。或夜京に大火のあつて、多くの遊客は急いで歸つたが、この男ばかりは旅宿の荷物には意を用ゐず遊びつづけて憚らなかつた。かうして約一ヶ月遊樂を續け、それから野郎、茶屋女、風呂屋等あらゆる種類の遊びに耽つた末、潔く遊蕩を思ひ切り、伊藤仁齋の門に入つて三年修學して江戸に歸り、無事に父の跡を嗣いだといふ。又この日の遊客の内京都の大盡で太夫高橋に馴染んで全盛を誇つた人が家は彼の大火に全焼して家産を失ひ、丹波の奥の田舎に引込んで百姓する身と急變したが、京を立つ時島原を訪うて、遊女、揚屋に名残りを惜むのであつた。さすがに人々の涙に送られながら高橋に小判の餞別を受けて行く、衰殘の哀さを示してゐる。この二客を對照させた説話であるが、この悲痛な衰の大盡への同情よりは、華やかな盛の大盡の生活に却つて目を惹かれるところが多いのである。後の大盡が島原に別れを惜しむ所に、無心の禿が丹波栗の土産を求むる詞があるが、何等悲痛の心を刺激し得ない。好色五人女の巻五を除く他の四話が、事件の性質の上では悲劇的性質を持ちながら、作品には悲劇的の感じの甚だ薄いのと同じく、事件の取り扱ひ方に大いに似たものがあるのである。かういふ大盡の見方には、佛教

的な無常觀に囚はれない、飽くまで現實主義的立場に立つてゐることを物語るものである。

本書最後の説話を見ると、一代の大部分を蓄財に費した親仁が、八十六の高齡まで生きて老病の床に就いた。そして一生を反省すると、自分は一體何のために生きて來たのであらうと、今更現實の歡樂を知らずに過ぎたことが、悔やまれるやうになり、夢現の目をさまして、灯が見たいと呟いた。家人がこれを聞きつけて、臨終が迫つて極樂を願ふ心の生じたものと察して、佛壇に燈火を點してやると、その灯ではない。自分の願ふ灯は廊の灯だといふので、最後の望みと察して、家人達が駕籠に乗せて大阪新町廊に連れて行つて、揚屋に太夫を揚げて見せてやると、元氣を回復して、ここで養生したいといひ出した。それで太夫を揚げ詰めにし、多額の金銀を人人に與へて、皆にちやほやさせると、病人は大いに喜んで、今三十年ほど早くここに氣が附かなかつたことを悔いたが、老體の悲しさ終に十分にこの享樂を味はふことが出來ずに、ここで死んでしまつた。西鶴の著作の他の例に依ると、全卷の最後の説話は終をめたいものにするのであるから、大盡盛衰記の終話として、この大盡を最もめでたい大盡の終としたものと知られる。これを他の例に比べると、西行法師の歌の「願はくは花の下にて春死なむその二月の望月のころ」の意を轉じて、富豪が廊を終焉の地とし、遊樂を最期とするといふ、元祿時代の豪奢生活の裏づけをした終焉と見るべきものである。現實享樂主義に徹底した考へ方であるのである。

更に開卷第一話を想起すると、五十三まで享樂生活に耽つた人が、この年齢になつて始めて夫婦の間に